

新春対談 2025

人類哲学継ぐ

新春対談
梅原賢一郎さん 京都芸術大名誉教授

×
しんめいPさん 梅原記念財団プロデューサー

大胆な仮説で独創的「梅原日本学」を打ち立てた故・梅原猛さんの生誕100年を迎えた。激動の昭和を生きた哲学者の「人類哲学」は今、私たちに何を語りかけるのか。戦争、パンデミック(世界的大流行)、自然災害、AI(人工知能)…。混迷を深めながら幕が開けた「昭和100年」の未来を開くため、京都で「知の遺産」継承に動き出した2人が語り合った。

猛さんの長男で京都芸術大名誉教授の賢一郎さん(71)と、東洋哲学を現代の視点で読み解く著書で話題を集める梅原記念財団のプロデューサー、「しんめいP」さん(36)。対談の場所は「哲学の道」に近い東山山麓の梅原邸。猛さんが最期を迎えた思索の森で、「分断」を越える道筋が探られた。(進行 京都新聞文化部編集委員・榊山聡)



—2019年1月、梅原猛さんが93歳で亡くなられて6年がたちました。

梅原 梅原猛とは誰であったのか。不在になつてから考えるようになり、結論とまでは言いませんが、見えてきたものもあります。そこで「梅原記念財団」として、今年から活動を本格化したいと考えています。それには若い人の「アンテナ」が必要で、その思つていた矢先、しんめいPさんの本に出会いました。切味のいい文体で、一気に読んでしまいました。本の監修の鎌田東一さんに紹介していただき、財団のプロデューサーを名乗ってもらっています。



哲学者・和辻哲郎も住んだ邸宅の日本庭園は東山の自然に囲まれている。ここで梅原猛さんは四季の移ろいを感じながら思索を深めた(京都市左京区・梅原邸)一撮影・吉原直歩

新たな知の枠組み模索 賢一郎さん

分断ほぐすヒント探る しんめいPさん

しんめいP(ペンネーム) 1988年、大阪府生まれ。東京大卒。大手IT企業「DEN A」に入社し、海外事業を担当した。「note」につづつ「東洋哲学本50冊よんだら」本の目録とかどうでもよくなくなった話」が話題を集め、その内容を大幅に加筆・修正した「自分とか、ないから。教養として」の東洋哲学」が刊行された。同書の監修は京都大の鎌田東一名誉教授が務めた。

突破するヒントですね。しんめいP 大阪の田舎で生まれ、東京大の法学部に進学しました。そこまでは順調でした。卒業してIT企業に就職したのですが3年ほどで辞めました。地方なら緩やかに働けるかなと鹿児島島の島に移住しましたが、東京よりも多種多様な人々と緊密に連携を取らないといけない。自分にはチームプレーが向いていない」と思い詰めました。「ピン芸人」として「ひとり芸日本」を決める「R-1グランプリ」に出場もしましたが、自分でも分かるほど全く面白くありません。妻も会場まで一切笑わず、果てに離婚。まさに八方ふさがりで、実家

に逃げるように戻つたのが31歳ぐらい。そんな時、東洋哲学の本を読むと心に響くものがありました。考えをまとめてみたくなくてインターネットの投稿プラットフォーム「note(ノート)」で書いたところ編集者の目に留まつて本に。執筆に3年半かかりました。

梅原猛さんの著書も参照

戦争を体験 死からの出発

—大正後期に生まれた梅原猛さんの人生は、激動の昭和と丸ごと重なります。梅原 誕生の時から死と隣り合っていた。宮城県の仙台で生まれたのですが、母は出産後すぐに亡くなりました。愛知県知多半島の伯父夫婦の家に引き取られ、育てられました。養母は尾崎紅葉の門弟、小栗風葉の妹、しんめいPの父に私を呼ばれたのですが、父は中学生の時、伯父に問いたし、実の子では

されています。しんめいP 梅原猛先生の著書との出会いは、まさに実家で東洋哲学書を読んでいた頃です。豊かな知識がありながら大胆な表現で切り込んでいく勇氣に引き込まれました。先生の「宗教の思想」シリーズは、自分の本の論にわたる下敷きに使っていました。

ないことを知りました。つらかったと思います。父が哲学を選んだ一番の根っこには、その体験があると思います。戦争も体験されています。梅原 名古屋で空襲に遭い、入るはずだった防空壕に直撃弾が命中し、友人焼けたたれた姿を目にした聞いています。そのまじな動もあつてか、東京の法務部を動

三島を同時代人として意識

—猛さんは、1970年に自決という衝撃的な死を遂行した作家・三島由紀夫と同じ年でした。梅原 同時代人として意識は全く意識していません。私は大学生の頃、三島の文学にかぶれていた時期がありました。ある時、父に「『憂国』が一番好きだ」と言いました。昭和のクーデター・二二六事件を基にした短編で、決起に誘われなかった青年将校が妻と心中する。パタニユ的な死とエロス」に私は引かれたのですが、父は「俺が一番嫌いだ」と即答でした。

父・三島には共通点もありました。戦後社会の世俗化への危機意識から、日本の伝統に目を向けたと思います。三島は、文武両道のヤマトタケルを日本文化の理念的な型(モデル)として思い描いていますが、父はむしろ、列島に息づく自然崇拜やア

める養父に、「政治は10年、哲学は100年」とたなかを切つて京都に出てきました。しかし、入学式を終え故郷に戻ると赤紙が届いていました。なぜ人は血を流し戦争をするのか。父の哲学は死から出発しています。最初の論文は、人間の存在を死の側面から語る「闇のバトス」でした。地獄から日本文学を読み直す「地獄の思想」、そして法隆寺を聖徳太子の怨霊鎮魂の寺とする「隠された十字架」、柿本人麿は水死の刑で死んだとする「水底の歌」にも、根底に死のテーマを讀むことができます。

—今年(2024)は戦後80年、戦争の記憶は遠ざかります。しんめいP 私は昭和63年生まれ。昭和の最後です。10代の頃、自分のストーリーのなき、空っぽさをよく感じていた。いい大学に行くとか出世を目指すとか、無理やり人生の意味を見いださそうとしていました。

しんめいP 「憂国」は割腹自殺のシーンが偏執的に書かれていて、ここまで書くと思わせない経験がない自分とは、ちよつと引いてしまつても、「三島由紀夫VS東大全共闘」という映画を見て感銘を受けました。1969年、三島が論敵が待ち受ける東大一人乗り込み。超一級の文化人である三島が学生相手に、ものすごくフラットでオープンな対話をします。学生が三島の矛盾を突いても徹高くない。自分の矛盾さえ認めたら逃げません。分断が叫ばれる今、対話の意味と価値を感じました。

「猛獣」包み込んだ京の風土

—既成の常識に立ち向かう「梅原日本学」の源(はし)はここにあったのでしょうか。梅原 名前が「猛獣」ですから。巷では「猛獣」とも呼ばれていました。権威や常識を

疑い、偽善や虚偽をかきつける鼻鏡は鋭い。家庭では孤独でした。母と姉と私がいる日常の生活空間からは断絶し、一人、ぼつねんと思索にふけ